

説教 『生きること、働くこと』 山本 護牧師
聖書 出エジプト記 3:13~15 / ヨハネによる福音書 6:26~29

場所は北のティベリアス湖(ガリラヤ湖 ヨハネ6:1)。ロウるさい尊大な律法学者はあまりいない。湖を見おろす山麓、少しの食料で(6:9)五千人が満腹してもパンが余るといふ奇蹟が起こった(6:10~13)。奇蹟に歓喜した群衆は翌日、イエスを湖の対岸で見つける(6:25)。イエスは神の「しるし」ではなくパンという実利を求める群衆を批判する(6:26)。そして「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい(6:27a)」と態度の転換を求めた。

「しるし(6:26)」とは、実利的な奇蹟のことではなく、「父である神が、人の子を認証された(6:27c)」こと。つまりイエス御自身。「人の子があなたがたに与える食べ物(6:27b)」とはこのイエスを信ずること。だが群衆には信ずる「しるし」より御利益的な奇蹟が大事なのだ。群衆は「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である(6:14)」と歓迎したものの、それはイエスを実利的な王に祭り上げることであった(6:15)。そりゃ、そうだろう。かつかつで暮らす群衆には今日のパンが大事なのだから。

律法がゆるい北の民とはいえユダヤ人である。「永遠の命に至る食べ物のために働きなさい(6:27)」と命じられれば、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか(6:28)」と彼らなりに応えようとする。イエスが「神がお遣わしになった者を信じて、それが神の業である(6:29)」と言うと、またもや実利的なものを求めてしまう(6:30)。考えてみれば、使徒たちとて五十歩百歩であった。

「永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である(6:27)」ここでの焦点は、パンや世の実利を獲得しても解決しない「魂の困窮」に関する事。これは経済的な貧富や、教育や知性の有無とは関係ない。「永遠の命に至る食べ物」の出処は、人間ではないのだから。イエスは、それが誰であろうと変わりなく、そのために「働きなさい」と求める。そこまで言われても群衆は、イエスのことを実利的な「パンの主(6:30,34)」としてしか見られない。

パンも、地位も、金も、友達という財産も、評価や称賛も、皆「朽ちる食べ物」に他ならない。こうしたものを求めるのではなく、「永遠の命に至る食べ物のために働きなさい(6:27)」と、私たちは戒められている。ガリラヤの群衆のように、永遠の命は気になるものの、今は当面の課題で精一杯だ、と思うだろうか。だが「働く」ことは日々の余裕とは関係ない。「何をしたらいいでしょうか(6:28)」と問う群衆に、イエスはただ「神がお遣わしになった者を信じて、それが神の業である(6:29)」と答えた。私たちにも、ただこれだけのことが求められている。イエス・キリストを遣わした神の業が日々の中心になるならば、私たちが生きる「働き」は、無理せず自ずと変わっていくだろう。

「神はモーセに、[わたしはある。わたしはあるという者だ]と言われた(出エジプト3:14)」。神はすべての存在の根底に「ある」。すべてを創り、すべてを統べる方。その神は、己が民の個別の現実に働かれる(3:15)。そうした「神の業」を信じては(ヨハネ6:29)、私たちがその「永遠の命の働き」に参加すること(6:27)。ただ受け身で戴くだけではない。私たち各々がその働きそのものとなるのである。



【おまけのひとこと】

自転車 可動する前輪が動いて方向が変わるのではない 重心が傾くゆえに 自ずと前輪が動く
なるほど 忠実な働きは 中心におられる神の傾き 小手先の敬虔ではない 日々の自然な転換